「婦人束髪会を起す主旨」を読む

結髪は、窮屈で苦痛、不衛生、経済的

「婦人束髪会を起す主旨」の要旨は、「結髪は①窮屈で苦痛②不衛生③経済的、また交際上問題があるとして、結髪をやめて自分でできる束髪をしましょう」というものです。全編、結髪の糾弾に満ちています。
主張の正しさを証明するために、いろいろな事例や具体的な資料を並べてたてています。なかには結髪を否定するあまり、こじつけに近いものもあり、すべてが信頼できるわけではありませんが、当時の髪結事情の一端をうかがい知ることができます。

「婦人束髪会を起す主旨」は、前文と前述の問題点、婦人束髪会への参加要請、で構成されています。ここではこの主旨について大胆に意訳し、その内容を検証しつつ、髪型事情や結髪、髷などの歴史などについても触れたいと思います。
（原文部分の意訳はゴシック体で表示）

わが国の生活や風俗は実に不便で不合理です。家屋、衣服、また座る生活習慣などを直さなければなりませんが、とくに急がれるのが婦人の結髪です。

日本の生活風俗はもとをたどれば、家屋にしても衣服にしても大陸に行き着いてしまいます。日本に伝来後、年月をかけて日本の気候風土にあったものに改良し日本のものにしています。
家屋については室町時代の書院造りの玄関がいまでも日本の家屋として残っています。玄関があって、靴を脱いで上がるのは世界でも日本家屋だけかもしれません。洋風の家屋やマンションでもたいてい玄関はあります。
衣服は普段は洋装ですが、成人式や結婚式など冠婚葬祭で着物を着る女性はいます。

髪型も大陸由来です。奈良時代、大陸から衣冠束帯が伝わると、男性は古来からの角髪（みずら）を捨て去り、髻をとり、冠あるいは烏帽子をかぶる風習になり、長い間定着します。女性については髪を上げよと命じられ髻を結ぶのですが、これは日本の女性にあっていなかったようで、平安時代には長い垂髪になります。
「主旨」がやめるように指摘してのは江戸時代に結われるようなった結髪です。

「主旨」は続いてわが国の婦女子の髪型の変遷について紹介します。

元禄慶長より前は、少女は髪を周辺で切り、婦人は垂髪にして被衣（かづき）におさめていたようですが、時代がたつにつれ、島田髷や丸髷があらわれ、芸技や娼妓の髪型は常に一般の婦女子の好むところとなり、今日では婦人の頭上に種々の異様を現出するになってしまいました。

「少女は髪を周辺で切り」というのは禿髪のことです。禿髪は少女の髪型であると同時に、仏門に入った女性もしていました。耳を出した絵画資料が多くみられますが、いまのボブヘアに近い髪型です。
垂髪は長いストレートヘアで､禿髪を伸ばせば垂髪になります。この垂髪に被衣（かづき）という一枚の布をかぶせて髪をおさめていましたが、垂髪のままではなく、おそらく後述の「馬のしっぽ」「じれった結び」など毛先や毛束を丸め輪結にして布の中におめていたと思われます。

そして「主旨」は、今日の婦女子がしている髪型を「種々の異様」と表現しています。その異様、つまり明治 18 年ごろ流行っている髪型について、さらに紹介しています。

・中年以上の婦人は「島田髷」「島田くづし」「夫婦髷」「丸髷」「くさめ」「しやぐま」「割唐子」「鈴いてう」「三ツ輪」「天神」「いてふ返し」「をたらゐ」「しやこ」「松葉返し」「綾いてふ」「ひようご髷」「ひようご結び」「唐人髷」「おさふね」「をばこ」「達磨返し」「じれった結」(俗に馬の尻ぽとも云ふ)「茶せん」
・少女は「蝶々髷」「かづらした」「がくやいてふ」「於多波古ぽん」「ふくら雀」
・宮中の女中は「下げ髪」「下げしたじ」「肩はづし」「吹きわげ」「しいたけたぼ」

当時の婦女子が好んでした髪型を紹介しています。これらの多くは江戸時代後期にすでに流行っていた髪型です。ここに紹介された日本髪のうち島田髷や丸髷、いてふ返し、割唐子などいくつかの日本髪は明治後期以降、大正、昭和にも結われています。

宮中の女中とありますが、江戸城多くの女房は 17 世紀中ごろまでは垂髪でしたが、明暦の大火を機に髪を上げるようになったといわれています。市中の女性とは違い、大奥独自に結った髪型で、しいたけたぼというたぼをしていました。

京の宮廷女官はまた違った髪型をしています。平安王朝時代の長い垂髪は室町時代、戦国時代には廃れます。宮廷といえども室町時代になると経済的な基盤がなくなり、優雅な生活は難しくなります。宮中の女中も普段はなにがしかの労働をしていましたが、働くには長い髪は不都合です。短めの髪にして、宮中の行事があるときは、かもじを継ぎ足し王朝風にしていました。

江戸時代、後水尾天皇や現皇室の祖・光格天皇が宮中儀式などの復活に力を注ぎますが、平安時代の様式を当時のまま復活することは困難で、髪型についても江戸時代の様式のものになっています。古式にのとった宮中行事といわれる、いまのものの多くは江戸様式と

いえるものです。

ところで日本髪といわれる髪型は文化文政のころから天保のころにほぼ完成しました。もともとは自らの手で結うことが女性の習わしとされ、女児は幼いころから髪が伸びると、母や姉らに教わりながら見よう見まねで自分の髪を結う稽古をしていました。しかし、江戸時代後期になると、複雑な髪型が増え、これらは各種の小道具が必要とされセルフでは結えなくなってきます。この時期、女髪結が増え、天保の改革では奢侈を禁ずる幕府によって捕追されたりますが、女髪結という仕事は江戸の婦女子にとって必要な職業で、数少ない女の職業でもありました。

「主旨」では、「じれった結」(俗に馬の尻ぽとも云ふ)とカッコ書きで「じれった結び」と「馬のしっぽ」を同一視していますが、『日本結髪全史』(江馬務、創元社)では別の髪型(「じれった結」「馬の尾」)として紹介されています。この髪型は簡便で、令和の時代でも、これに似た髪型をしている女性がまれですがいます。

日本髪の場合、名称が同じでも異なる髪型だったり(兵庫髷など)、逆に異なる名称でも類似した髪型もあります。日本髪は時代性、地域性が強いという特性があるため、名称に混乱があることを覚えておく必要があります。
なお、日本髪の髪型については、『日本結髪全史』や『江戸結髪史』(金沢康隆、青蛙房)に詳しいので、参照してください。

そして、いよいよ本旨に入ります。
これらの異様奇風な結髪の風習は、窮屈不便にして、文化の進歩に大害があるので何とかしなければいけません。
箇条書きにして、その理由を陳述しましょう。
第一、我国女子の結髪風は不便窮屈にして苦痛に堪えざること。
第二、我国女子の結髪風は不潔汚濁にして衛生上に害あること。
第三、我国女子の結髪風は不経済にして且交際上に妨げあること。
(この箇条書きは原文のままです)

各項の説明へと移ります。

結髪は、不便で窮屈で苦痛

第一の理由、我国女子の結髪風は不便窮屈にして苦痛に堪えざること。

いまのわが国の女子の結髪は、だいたい元結をとり根元を堅く締めています。さらに鬢を張り、髪全体に膏油を塗って固めます。その上に脳天に頭大の髷を結って、あたかも山頂に城郭を築いているようです。とくに丸髷と島田髷は歴然としています

日本髪は、大きく4系統に分類できます(諸説あります)。島田髷系、丸髷系、唐輪髷(兵

庫髷）系、笄髷系です。このうち男髷から変化した島田髷系と丸髷系は髻をとり根元をきつく巻いて固定します。
丸髷と島田髷は令和のいまでも目にすることがあります。時代劇に出てくる女将さんのしているのはたいてい丸髷です。島田髷は芸者衆がしていますが、地毛ではなくかつらですが。
「根元を堅く締める」のはこの２系統の髷です。長年、この髷をしていると、髻部分が薄くなります。昭和の時代、その筋の老女は天頂部が薄くなった人がいました。ポニーテールも同様で､あまり強くひっつめていると薄くなります。ポニーテールハゲともいいます。

膏油は、江戸時代は鬢付け油と呼んでました。木蝋と植物油を混ぜたものです。木蝋を多くすれば髪を固定するのに有効ですし、油を多めにすれば艶出しになります。より強固に髪型を維持するには、松脂を加えることもあります。あとに出てきますが、膏油で固めた髪は洗うのに手間がかかります。

そして「頭の上に城郭を載せている」。かなりオーバーな比喩表現ですが、この主旨を書いた人の想いなのでしょう。
この主旨の著者、おそらくドクトル渡辺鼎だと思いますが、結髪した髪に使用されている備品類の重量を計測しています。
最近計測した結果として
円髷形十九匁、髢三十五匁、髢差五匁、かまひ七匁、笄八匁、釵簪二十匁、櫛三匁、根懸け四匁、合計九十三匁、これに膏油、たぼ止め、かせなどを合すれば、百匁になるでしょう

100 匁は 375 グラム（1 匁＝ 3.75 グラムで計算）になります。ざっと 400 グラム。軽くはないですが、城郭ほどの重さはないようです。円髷形というのは、髷の土台として髷下に置く小枕のこととだと思います。「かまひ」は勉強不足で不詳です。

大変な思いをして作った結髪ですが、これが簡単に乱れてしまう。乱れないようにするための涙ぐましい努力を列挙します。

鬢髷は、かろうじて膏油の力でその形を保っているので、少しでも触れたりするとすぐに乱れてしまう。女子は結髪が乱れることを恐れ、重い結髪をのせ頭が痛くなるのを我慢して、高い木枕で眠る。年頃の女性が観劇などをする場合、前日は安眠することはできません。箪笥などのよりかかって一晩仮眠することもあります。

膏油が髪型を保つ形成力、持続力は高く、少し触れたぐらいで乱れることはないのですが、安眠することは確かに難しい。
高枕は江戸時代からの寝具です。木製なので健やかに眠るのは難しい。しかも女髪結が結うのが一般化した江戸末期以降は商売女は別にして、一般の婦女子は一度結ってもらうと数日は維持していたので、睡眠時の苦労はついてまわりました。

令和の時代でも、成人式当日の美容室の予約がとれずに前日に髪をドレスアップした女子が安眠できなかったという話は聞きます。

「婦人束髪会を起す主旨」の主張はおおむね正しいといえます。そして､結髪に対して「窮屈不便の極みといはざるをえない」と強い口調で糾弾し､「今日の結髪を改めない限り、決してこの窮屈不便から逃れることはできません」と、結髪を止めるよう訴えます。
これが第一の理由です。

不潔汚濁にして不衛生

第二の理由、我国女子の結髪風は不潔汚濁にして衛生上に害あること。

第二の理由は、衛生面についてです。

衛生上の観点から結髪を論じると、いまの婦女子の結髪は、直接、間接問わずその害が実にはなはだしい
と、まず結論を述べたあと、頭髪の役目について紹介します。

頭髪は、熱の不導体で寒さを防ぎ、暑さをしのぎます。また思いがけない危害を防ぎ頭脳を守るためにあります。しかし、いまの結髪はこれらの点にまったく留意せずに、飾り立てることばかりに専念しています。

頭髪の役割は、暑さ寒さを防ぎ、紫外線の影響も和らげます。また体内にたまった鉛や水銀となどの有害物を排出することも知られていますが、なんといっても物理的な衝撃から頭を守ることです。さらにいえば、人を美しく見せる役割もあります。

硬軟いろいろな膏油を塗って髪を固め､なおかつ固く結って頭髪内の通気を妨げています。それだけでなく、髪に汚れが附着するため、数日たつと一種の臭気が漂います。周囲の人は臭いに耐えられません。ですが、長年の習慣でこの臭気に慣れてしまい、これを婦人固有の臭いとみなしています。

膏油、鬢付け油は香料を含んでいるものが多く、結髪したてのころは問題ありませんが、何日か経つと皮脂や汚れと混ざり､「主旨」が指摘するとおり、一種独特な匂いを発したといいます。この匂いを臭気として嫌う人もいれば、婦人独特の匂いとして受け入れていた人もいたようです。

女髪結のもとに弟子入りすると、髪梳きをやらされます。結った髷を解いて梳き櫛で髪を丁寧に梳くのですが、膏油にフケ、皮脂などが混ざり合った独特の臭気があり、この髪梳きに堪えられずに辞めてしまう弟子もいたといいます。不衛生な一面があったのは確かです。

不潔なために、いろいろな黴菌を生じて、ときにはハゲることもあり、あるいはしつこい頭瘡病（おでき）を発症するのをたびたび見ます。とくに児童は、父母が注意していないと、すぐに頭瘡病を発症します。

細菌が繁殖して脱毛することはまれにあります。主に真菌によるものです。
頭瘡病とにありますが､化膿性毛包炎や化膿性汗腺炎などのおできのことかと思われます。これがひどくなると脱毛することもあります。ただしこれらの症状はまれです。

近ごろ頭瘡を患う男子は、丁髷をしていたむかしと比べて大きく減少しています。これも婦女子の結髪が不潔なことを証明しています

明治 18 年のころ男子はほぼ 9 割は断髪姿になっていました。20 年代には変わり者以外はほぼすべての男子は髷を落とし断髪でした。むかしは婦女子と同様、頭瘡病を患う男子が多かったと主張していますが、正確なデータがあるわけでないので実際のところはわかりません。また多くの男子は中剃りや幼少のころは周囲を剃ったりしていましたので、婦女子の結髪とは状況が違います。ただ剃刀などの衛生消毒が不備で白癬菌による皮膚病などを患う人は少なくなかったといいます。

また重い髷をのせて、かつ頭髪をきつく結っているため、頭病を患ひ、眼病を醸し

結髪が頭病、眼病のもとになっている、と主張しています。頭病というのは精神疾患のことかと思います。エビデンスのない時代ですので、言いたい放題です。

このほかにも、間接的に健康を害することが少なくありません。日本の婦女子に頭脳病が多いのは、結髪のせいです

頭のいかれた婦女子が日本に多いのは結髪のせい。こうなると郵便ポストが赤いのも、電信柱が高いのも、みんな結髪のせいになりそうです。

結髪するには、常に多量の膏油を塗るため汚れがはなはだしく、毎月数回は必ず洗わなくてはなりません。ところが髪を洗うのに、一塊の石けんではきれいに洗えません。そのため、いろいろな粉末を塗って、熱い湯を注いで、激しく髪をこすって洗うのですが、その害は実に恐ろしい。また洗髪にかかる時間は長時間に及び、ほとんど半日がかりになります。洗っている間は始終、頭部を下げていなくてはならないので、血行が阻害されます。半日にわたり、頭痛に苦しむこともしばしばあります。

一塊りの石鹸ではきれいならない、とありますが、日本で石鹸が普及するのは明治 30 年代になってからです。石鹸そのものは安土桃山時代に輸入されていましたが、明治 18 年当時は高級品で、一部の富裕層しか使えません。「主旨」を著者は富裕層のひとりだった

のがうかがえます。
当時の石鹸は輸入品にしろ国産にしろ、いまのシャンプーとは比べようもありません。毛髪への損傷が考えられます。さらに洗粉（原文では「沫粉」とあります）で洗うのはさらに傷みそうです。「沫粉」は米糠や小麦粉にホウ酸や重曹をまぜたものが多く使われていました。

半日かかって洗ったというのは多少オーバーにしても、長時間かかったのは想像できます。平安時代の女官は侍女らをともなって、河原に出向き一日かけて髪を洗い、乾かしていました。これはピクニック的な意味合いもあって、一種のレクリエーションとして御髪洗いを楽しんだ一面がありましたが、明治の結髪女性は大変な作業でした。

髪が汚れたままだと、服や襟、寝具なども汚すなど、間接の害は一々枚挙に暇がありません。このまま女子が結髪をしている限りは、これらの害を取り去ることはできません。これが私が婦人の結髪はやめたほうがいいとする第二の理由です。

髪が汚れていれば衣服や寝具を汚す恐れのあるのは、ごもっともなことです。
これが第二の理由です。

不経済で、不便

第三の理由、我国女子の結髪風は不経済にして且交際上に妨げあること。

婦女子の結髪を経済面で考えると、いまの結髪にかける費用は冗費です。たとえば東京の場合、一回結髪するごとに支払う金額は、上等は十銭、中等は七、八銭より五、六銭、下等でも三、四銭を下回ることはありません。また、これに盆暮などに、女髪結に祝儀として、多少の金銭を贈るのが習慣になっています

女髪結に支払う金銭が無駄で不経済で耐えられません、といっています。背景には結髪はセルフで行うものという認識があるのだと思います。
明治 18 年当時の東京の髪結料金を上・中・下の 3 ランクにわけ、それぞれの金額が示されています。
上等は 10 銭
中等は 5 ～ 8 銭
下等は 3、4 銭

いまの値段にざっくりと換算すると
上等は 2 千円
中等は 1 千円～ 1600 円
下等は 600 円～ 800 円
ほどになります。

明治時代の 1 銭は 200 円（1 円＝ 2 万円）とされていますが、時代が経るに従い価値は下がるので、明治中ごろはこれよりもいくらか安かったと思われます。いずれにせよ正確な換算は難しいので、おおよその料金です。

一見いまの美容料金より安いように思われますが、技術内容が違うし、しかも利用頻度も違います。後述されていますが、芸者筋はほぼ毎日結いますし、一般の婦女子も 4 、 5 日ごとに結っていました。
昭和の時代にも「家計調査」に「なでつけ料」（いまはありません）がありましたが、それに近い技術内容、料金設定だったと思われます。

女髪結は江戸時代中ごろに発生し、当初は遊女の髪を結っていましたが、女髪結が増えるに従い料金は安くなり、安くなると女髪結に結ってもらう女性が増えていきました。天保の改革では、奢侈を禁止する幕府によって女髪結は捕追されるのですが、改革が失敗すると再び増え、幕末には一般の婦女子も女髪結に結ってもらう人が増えました。明治になって女髪結の仕事が公認されると、さらに増え、料金が下がり、さらに多くの婦女子が結髪のプロである女髪結に結ってもらうようになるなど、19 世後半から 20 世紀にかけて女髪結に結ってもらう女性は増加の一途をたどりました。

女髪結に髪を結ってもらう女性が増えたといっても、明治中ごろの東京では女性の半数ぐらいだったでしょう。相変わらずセルフで結う女性もいたし、祝い事などのハレの時や外出するときだけ女髪結に結ってもらっていた人も多かったはずです。

地方や農村ではまだ多くの女性はセルフでできる簡便にまとめて手ぬぐいなどで包んで作業などをしていて、ハレのときなどは、親戚や近所の手先が器用で結髪が上手な人に頼んで結ってもらっていました。
ちなみに令和の時代でもセルフで済ます女性は 15％ほどいます（リクルート「美容センサス」2020 年上期）。

「主旨」に「盆暮れには付け届けをするのが習わしになっている」とありますが、多くの女性が馴染みの女髪結に付け届けをしていました。付け届けすることで、無理を聞いてもらえることを期待したようです。

上等は三日目ごとに一度髪を直し（芸娼妓ら日々結髪する）、中等は四、五日目に髪を直し、下等は六、七日目には必ず髪を直します。これを平均すると女子一人に付き毎月六回は結髪し、毎回五銭を支払うとすれば、年に費やす金額は三円六十銭以上になります。このほか膏油、元結、祝儀などに費す金額は、毎年平均一円を下回ることはありません。その外に櫛や笄などにかかる費用は多額ですが、これは洋風の束髪に改めたとしても、帽子や他の装飾に多少費用がかかるので、計算から外すとしても、東京婦人が結髪にかける費用は、一人に付き毎年平均四円六十銭以上になります。

ここでは結髪にかかる費用を計算しています。祝儀などの費用を加えた合計では、年４円６０銭以上、髪結賃だけでは年３円６０銭かかるといってます。３円６０銭はいまの価値で７万２千円です。令和の時代の女性は年に 4.48 回美容室に行き、１回当り 6846 円支払っており、年間３万 0670 円を支払っている計算です（リクルート「美容センサス」2020 年上期）。利用頻度が現在は年 4.48 回なのに対し、明治は月６回・年 72 回、この違いが年間支払額に大きく影響しています。

明治十五年一月の調査では、東京府下の女子は総員四十九万千三百二十一人です。このうち三分の一を老少の婦人として除外すると、十七歳前後より五十歳前後の女子の数は少くとも三十二万千五百四十六人を下回ることはないはずです。いま一人の女性に付き結髪のため毎年四円六十銭を費やすとすれば、其総額は百五十万六千七百十一円になります。

結髪にかかる費用がいかに多額になるかの計算が続きます。前段で女性１人当りが結髪にかける費用を概算しましたが、その計算をまず東京府に広げます。
明治 15 年の調査で東京府の女子人口は 49 万 1321 人といってます。ちなみに男女を合わせた東京府の人口は 98 万 7908 人（『東京都統計年鑑』東京都総務局統計部調整課 / 編）になります。

「主旨」では、結髪の対象者をざっくりと 17 歳前後から 50 歳前後とし、その人口 32 万 1546 人が結髪に年間 4 円 60 銭を使うと、府下では 150 万 6711 円になると計算しています。
16 歳以下と 51 歳以上を除外していますが、前述の「美容センサス」2020 年上期は 14 歳以下と 70 歳以上を外しているので、同様の考え方といえます。

また「主旨」では、17 歳から 50 歳までの対象となる女性全員が女髪結を利用しているとしていますが、実際は全員が利用しているとは考えられません。利用率といいますが、2020 年美容センサスでは対象年齢の 85％が美容室を利用してしています。利用率は、サービスの価値、利用者の経済状況、意識、社会の風潮などにもよって変化しますが、明治の中ごろはそう多くないはずです。せいぜい半数程度かと思われます。

「主旨」は東京からさらに全国へと及びます。

東京府だけでも巨額といわざるをえませんが、全国の女子の結髪の費用を算出してみましょう。もっとも地方の女子は自ら髪をおさめ、女髪結に頼らない女子が多くいますし、髪結の料金も東京ほどは高くありません。
東京府を除いた全国の女子は千七百七十七万三千五百五十六人いて、東京府と同様、その三分の一を老少として除くと、千百八十四万九千〇三十八人になり、その半分が髪結に結ってもらうとします。これは過大な数字でしょうか。

ここで注目したいのは、地方、田舎では、セルフで髪を処理する女性が多いこと、そして髪結賃は東京より安いといっていることです。髪結賃については確かな資料はありませんが、地方が安いのは想像できます。また、半数の女性が女髪結に結ってもらっているとしていますが、それほど多くの女性が女髪結に頼っていたかは疑問です。明治の中ごろはまだ農業中心でした。農家では女子も労働していたはずです。農村では一部の豪農の女子、地方都市でも富裕な商家や官吏らに限られていたと思われます。
いみじくも「過大な数字でしょうか」といって、「主旨」では過大でないことを言いたいのですが、当時の社会状況を考えると過大です。

計算はさらに続きます。

平均月に四回髪を結ってもらい、毎回三銭を払い、このほかに元髪、膏袖などの費用として、月三銭がかかるとすると、一人一ヶ月の費用は平均十五銭になります。一年では一円八十銭です。五百九十二万四千五百十九人の費用を合計すると、年に千〇六十六万四千百三十四円の巨額なることを認識すべきです。これに東京府下の分を合計すれば日本全体では千二百十七万八百四十五円の多きを費やすことになります。

結論は、髪結費用は全国で 1217 万 8145 円の巨額に達する、と主張しています。データらしきものを引用して延々と計算した結果の金額です。いまの価値に換算すると 2400 億円を超えます。鹿鳴館が 18 万円で建ったといいますから、確かに巨額です。
ちなみに、いま理美容業界の市場規模は約 2 兆円といわれています。男女を合算した数字で、女性が使う額は 1 兆 4 千億円弱程度と推定されます。

引用したデータのうち、女子人口、髪結賃などは当時の現況に近い数字だとしても、女髪結に結ってもらっていた利用率は、疑問が残ります。

「主旨」は、髪結の費用が巨額で冗費である、という主張から離れて、時間の問題や婦女子の行動を制約していることに論点を移します。

くわえて、女子の結髪の風習は、無駄に時間を費し、そのために用事を行うのに支障をきたし、また髪結によって付き合いの約束が守れなくなることもしばしばあります。我が国の婦女子は、人と会うときには、女髪結を呼んで髪を整えてから外出するのが習慣になっています。髪を結うための時間がかかります。

当時の女性は人と会うときは、着飾っていましたが、その一環として髪をプロの手で整えていたのがわかります。もちろんある程度の富裕層の女性のことだと思われます。また、女髪結は店を構えることはなく出髪、いまの出張理美容の形態で、客のもとに出向いて結っていました。店を構えなくても、女髪結の自宅で結うこともあったかもしれませんが例外といえます。

明治 30 年代の後半には「理容店」などの名称で女性相手の店が登場しますが、数は少なく東京府でも珍しい。また、いまは「理容」は主に男性相手の店の名称になっていますが、「理」には整えるなどの意味があり、男性のザンギリの「西洋理髪」は髪を整えるという意味で、女性相手の「理容」は容姿を整えるの意味で使われていました。女性相手の当時の「理用店」は美顔術やメイクも行われていました。「理容」のほかにも「整容」「美装」なども使われていましたが、後年は「美容」が主流になります。

また結髪婦に差支えがあって来られなくて髪が結えないときは、外出を取りやめ、結果用向きを果たせません。会う約束を破っても反省しません。

女髪結が客のもとに行かない、というのは例外中の例外のように思われますが、髪を結うのにてこずって時間がかかり、次の客宅に約束通りに行けなかったりする女髪結がいて、約束通りには行けないこともあったようです。売れっ子の女髪結は目いっぱいに予約を入れることが多かったといいます。なかには結髪した客と話し込んで遅れていまったケースもあったようです。女髪結が約束通りに来ないので、その結果、外出を止めてしまうことはある話です。

髪を飾りおしゃれをするにはセルフでは難しい髪型が流行っていて、女髪結の手にかからなければならなかったのが伺えます。明治 18 年には女髪結は女性の仕事として、東京、京都、大阪の三府をはじめ人口の多い都市では定着していました。

会う約束を破っても反省なし、というのは客の問題かと思うのですが、当時は女髪結に結ってもらうのが一般化し、女髪結も遅れることが多くあって、そういう事情が常態化していたのだと思われます。

ちょっとした用事があるときなど、老婦を除いて女子は髪が整っていないことを理由に、おいそれとは外出しません。父兄や夫はこれをみても咎めたりしないのが常となっています。それどころかその用向きをかわって行っています。

髪が乱れていると、老女を別にして、外出をさけるのが婦女子です。その用事をかわって男性がしています。男性にとっては迷惑な話です。

そして、「主旨」は怒り、第三の理由を締めくくります。

…ああ、結髪の弊害、極まれり。女子の交際を妨げて、文化の進歩を害すること、実に少々ならず。この弊害は女子の結髪の風習を改めない限り続く。これが第三の理由です。

男性が結髪を好むのも慎んで

「主旨」では、「おわりに」という見出しをたてているわけではりませんが、三つの理由を

あげたあとに締めくくっています。

我が国の女子の結髪は、窮屈で不便、かつ衛生面でも害があり、さらに経済的にも不要の支出であることは、これまで述べてきたとおりです。
この結髪を西洋の女子のような髪型にすれば毎夜、髪を解いて安眠できるし、翌朝、髪を洗い自らの手で整え、膏油も塗らなければ、清潔でいられ、心も爽やかになります。婦女子はみんな洋髪にすべきです。

これまで結髪の問題点を指摘してきましたが、ここではじめて洋風の髪型をすすめます。簡単に整えることができ、夜ごとに髪を解けば安眠でき、心も爽やかになると主張しています。だから日本髪をやめて洋髪にしましょう、というわけです。

いますぐ洋風の髪型にするか、洋風と「達磨返し」「じれった結び」「をばこ」の類を折衷するなど工夫して、軽便な束髪法にするといい。

洋風の髪型というのは、「主旨」には具体名はあげていませんが、婦人束髪会ではあげ巻き、下げ巻き、マーガレイトなどいくつかの髪型をあげています。
ここでは、「達磨返し」「じれった結び」「をばこ」と洋髪とを折衷した髪型の創作も提唱しています。３つの髪型といいましたが、「達磨返し」「じれった結び」は髪型といえますが、「おばこ」は「おばこ結び」のことだと思われ、結い方の技法のひとつです。

「じれった結び」は、長い垂髪の毛先を結った「馬のしっぽ」といわれる髪型が原型です。「馬のしっぽ」という髪型は江戸時代前期に菱川師宣が描いた見返り美人に近い髪型です。見返り美人は、垂髪がタボになる途中の段階の後ろ髪の処理といえます。

毛先に結った「馬のしっぽ」の髷を丸めながら後頸部あたりまで結い上げたのが「じれった結び」になります。前髪、鬢などはとらない単純な髪型です。「達磨返し」は「じれった結び」で結んだ髷を天頂部あたりまで上げて、笄もしくは簪で留めた髪型です。「じれった結び」同様、前髪、鬢はとりません。

「馬のしっぽ」は長い髪が乱れるのを防ぐために毛先を結んだだけの簡便なものです。髪を洗ったあとなどに仮に結い留めするために結うものです。「じれった結び」も簡便な結い方で、普段はこの髪型で済ませていた婦女は江戸期にも明治期、さらには大正期にも多くいたのではないかと思います。忙しい主婦や農作業をする女性などは結髪に長い時間をさけません。簡便にまとめられるこの髪にしていた農婦は多くいたと考えるのが妥当です。農婦はこの髪型に手拭いをかぶせて、埃に汚れるのを防いでいました。

「達磨返し」は簡便な髷にはちがいありませんが、この髪型は江戸時代は遊郭のやり手婆がしていたといわれています。明治になっても伝法肌の年増女がしていた髪型として知られています。

「馬のしっぽ」は、婦人束髪会が推奨するマーガレイトに似た髪型です。「じれった結び」も洋髪と折衷することは可能かもしれませんが、「達磨返し」は少しハードルが高そうです。「主旨」では洋髪は簡便と決めつけていますが、洋髪といってもいろいろあります。アップスタイルは手間がかかります。装飾性の高いアップスタイルはなおさらです。
日本の婦女子がしていた結髪は確かに手間はかかりますが、なかには「馬のしっぽ」や「じれった結び」のような簡便な髪型もあります。

日本の婦女子がしていた髪型はすべて日本髪とする解釈もありますが、狭義には、前髪、鬢、タボ、そして髷がある髪型に限定する解釈もあります。その辺のところは別稿でまとめたいと思いますが、狭義の解釈ですと、「馬のしっぽ」「じれった結び」「達磨返し」は日本髪の範疇には入りません。

「おばこ結び」は髷先の処理方法をさした言葉です。髻を結んだあと、毛束をぐるぐると巻いて、根元に笄をさし、巻いた輪の上に出して留める処理の仕方です。江戸時代末ごろから明治時代に広く結われてました。
山東京山の『歴世女装考』(1855)に、「蛇がわだかまりたるやう」と表現していることから、髷先を蛇がとぐろを巻くように、とする説明も見られます。また、喜多川守貞の『近世風俗志』にも触れられていて、「略中の正」に位置づけられています。略儀のなかでも正統派といった意味合いで、日常広く結われていたのがわかります。

「おばこ結び」は島田髷や丸髷と違い、髪の面を出さずに毛束として巻いて処理しているのが特徴で、「おばこ結び」のように単純に巻いただけの結い方以外にも、いろいろと工夫した巻き方が創出されています。「おしどり」「おたらい」「竹の節」「うつお先笄」などがあります。
結婚した婦人がした結び方ですが、色鮮やかな縮緬の手絡（髷かけ、ともいいます）をつけて若い娘もしていました。
「主旨」を受けて設立される婦人束髪会のパンフレットには、おすすめの洋髪が掲載されていますが、その中の「西洋上げ巻」「西洋下げ巻」に似ていなくはありません。

婦女子の結髪の風習を改めれば、これまで述べてきた三つの害を取り去ることができます。女子の結髪の害は大きく、男子が丁髷をやめて、ザンギリになったのに比べようもないくらい、やめたときの効果はあります。その結果、婦女子はより爽やかな日常生活をおくることができます。私はかねてから、婦女子の結髪の風習を改めるべきだと思っていました。

江戸の頭髪風俗の中心は、男性は丁髷、女性は結髪でした。世界的にみても珍しい髪型で、

日本だけのものです。技巧を凝らして作りこんだ髪型は文化の一つといっても過言ではありません。
「主旨」は男女の髪型の比較をしていますが、女性の日本髪のほうが手間がかかります。

丁髷はその大半が月代とセットになっています。月代は戦国時代末期から行われ、同時にそれまで男子の風俗として数百年の長期にわたり定着していた烏帽子の装着の風俗がなくなります。当時は丁髷ではなく、髻を結んだだけの髷か毛先をほぐした茶筅髷で、曲げてはいません。月代も大きくしています。

烏帽子から月代・髷へと変化したのは、戦国の世で戦闘状況が日常的に行われていた時代背景があったものと考えられます。兜や足軽も陣笠をかぶって頭部を保護しますが、戦時には烏帽子は不要でした。また戦国時代は武士だけの戦いではなく農民らも加わった総動員的な戦闘状況が続いていました。日本の戦国時代だけではありませんが、その後の第一次世界大戦、そして太平洋戦争（15 年戦争）では同様に全国民が動員される戦争は風習、風俗に変革をもたらします。

江戸時代になると髻を曲げた丁髷になり、月代の大きさもやや小さくなります。男性の丁髷、月代は月代の大小、丁髷の変化、タボや鬢の厚み、髻をとる位置の違いぐらいしか、変えられる余地がありません。
宝暦から天明のころには、辰松風、文金風、髷を極端に小さくした本田髷など通好みの髷が登場しました。これを繊細でしゃれているとみるか、退廃的とみるかは後年の判断になりますが、粋を好んだ江戸っ子は気障と感じたに違いありません。

粋の反対に野暮がありますが、野暮は決まりきったことを決まったとおりにしていることで、時と場合によっては野暮がいいときもあります。粋の反対は気障です。宝暦から天明のころの髷から文化文政以降は、落ち着いた髷になっていきます。

髷は小名風など極太もあります。またいなせ髷といって、月代上で曲げた髷もあり河岸の江戸っ子に人気ありました。鰮背からきている名称のようです。

髻の位置は通常は天頂部・後頭上部にとりますが、江戸時代初期には、後頭突起部あたりにとり、タボを長くした髪型を好んでした傾奇者が多くいました。
いまの時代劇の舞台は文化文政、天保ころの時代を背景にしていますが、この当時は月代も髷も落ち着いたものになっていて、時代劇に登場するかつらは妥当です。あえていえば、町人はタボ、鬢に厚みがあり、武士はひっつめて厚みがない髪型が多いのですが、個人の好みもあり、いろいろでした。

月代・髷は妻帯していれば妻が月代を剃り髷を結ってました。妻は子供がいれば子供の頭の処理をしていました。江戸時代、庶民の家では家庭内で処理していました。将軍や大名などの特権階級の人は近侍する者があたっていましたが、ごく一部です。

髪結床は上方では戦国時代末の安土桃山時代、江戸では開幕後、江戸城の建築、江戸の町の建設が始まったころの早い時期から仕事をしていました。上方は京の戻り橋、江戸は赤羽根が発祥の地といわれてます。京に向かう人、江戸に向かう人が目的地に着く直前に月代を剃り髷を整えました。

男性の月代・髷をする髪結床は、単身者が相手です。江戸、京、大坂の三都のほか大きな町や、宿場などで営業をしていました。
また､江戸詰め大名の藩邸では器用な武士が同僚の月代､髷を結っていました。各藩によって特徴ある結い方をしていたようで、江戸の住民は髷を見て、どこの藩の武士かわかったといいます。
武士が町中の髪結床を利用することもあります。髪結賃は幕領地では、時代によって、また地域によって 16 文、20 文、24 文、28 文、32 文などと決められていましたが、これは一種の最低料金で、武家はこの料金を払ってすませていました。貧しい町人はこの賃料で済ませていましたが、稼ぎのある町民はこの賃料に心づけを置いておく人が多くいたといいます。

江戸の町で髪結賃が決められていたのは、髪結床が町の自治組織に組み込まれていたからです。髪結床と町内自治との関係、明治期になっての理髪業者と所管する警察との関係は業務の独占営業権の確保というテーマがあるりますが、このことについては別稿で紹介したいと思います。

男性の丁髷に比べると、女性の結髪は複雑です。男性の丁髷は宝暦・天明のころ、特異な辰松風、文金風、各種の本田髷が現れたことを紹介しましたが、女性の結髪もそのころ灯篭鬢、透鬢という特異な鬢が登場し、一時代をつくりました。鬢さしを用いて鬢を左右に大きく張り出した結髪です。宝暦から天明にかけてを宝天期ともいいますが、この時代は異風が流行る時代背景があったのかもしれもしれません。

女性の結髪をする女髪結は上方に遅れて江戸に登場しますが、この灯篭鬢はセルフでは難しい。芸娼らが結った髪型として知られ、結髪のプロである女髪結が結ったのは間違いありません。このような素人の手では結えない髪型が登場してから、女髪結が誕生し、徐々に一般富裕層の婦女子の髪を結うようになっていきます。

女性の結髪も文化文政のころには落ち着いて、島田系の髷や丸髷が中心になります。江戸末期にはおばこ結びが登場し、これらの髪型は明治以降にも結われます。

「主旨」が主張するとおり、女性の髷に比べたら男性の丁髷は簡便なのは確かです。

結髪をやめれば、衛生的になり便利になります。婦女子が結髪を続けているのは、男性の好みに合わせようと努めていることも背景にあります。男性が結髪姿の女性を好んでいる

間は、女性は結髪の風習から抜け出せません。

日本の女性が結髪を続けているのは、結髪を好む男性がいるからだ、といってます。
男性の丁髷は明治４年８月に出された、いわゆる断髪令で洋髪へと徐々に変わります。断髪令というとザンギリ頭を強制するように聞こえますが、髷を結わずにザンギリにしてもいいですよ、といった勧奨レベルです。同時に出された帯刀禁止令も武士は帯刀しないでください、といったレベルです。
武士の帯刀は明治９年の廃刀令によって、所有するこが禁止されています。断髪は明治天皇が明治６年３月に断髪して急速進み、この「主旨」がだされた明治 18 年ごろにはほぼすべての男性はザンギリになっていますが、人々の生活に根付いた風習は一朝一夕には改まるものではありません。

明治４年の断髪令をあと、断髪する女性がいました。断髪令は男子に限ってとは明記されていませんが、男子を対象にすることを前提にしてようです。明治政府は翌年女子の断髪はしないようにと命じています。軽犯罪法レベルの法規ですが、女子の洋髪化は認めませんでした。
当時の新聞は、女子の断髪を西洋化の位置づけから賛同する論調もありましたが、少数で大半は反対でした。女子の断髪は見た目では男装化ともいえます。そのむかし、白拍子、阿国歌舞伎、湯女の根結髪（ポニーテールに近い）など、男装した女性による売春が行われていた例をあげて、女子の断髪は風紀を乱すとして反対した論調が多くあります。

明治政府は洋風化をすすめましたが、その背景の一つとして西洋人からの批判があったと思われます。男子の丁髷は多くの西洋時から奇異に映ったようです。それに対し、女性の日本髪は逆に高評価でした。「芸者ガール」という言葉には好奇な意味合いもありますが、西洋の男性にとって日本の女性は評価は上々だったようです。
外国人から評判のよくなかった、婚婦のお歯黒は維新後、廃されています。剃り眉の風習もなくなりました。お歯黒、剃り眉については江戸時代、結婚した婦人の風習でしたが、これは当の婚婦からも不評でした。「面直し」とも称され、顔の印象がまるで変ってしまうのです。江戸時代の川柳に嘆き悲しむ句が見られます。

江戸時代を舞台にした初期の無声映画にお歯黒をして眉を剃った女性を見たことがありますが、奇異な印象を受けました。時代考証を厳密にするなら、婚婦はお歯黒、剃り眉になりますが、令和の日本人には受け入れ不可能、拒否されそうです。

明治になって、お歯黒、剃り眉が廃されて、結髪が残ったというのは、やはり結髪には美しいからからです。
幕末から明治維新前後にかけて来日した外国人は「若い女性はとても美しい」と書き記しています。もっともそのあと、「老いるのが早く老女は美しくない」と続きますが。

明治政府は男性を前提として断髪令を出したのだと思いますが、断髪する女性がいて、断

髪を率先していた木戸孝允さんは戸惑い、慌てたのではないでしょうか？

丁髷からザンギリにした日本男子ですが、明治 15 年に来日した仏の風刺画家ビゴーは、日本髪の女性はそれなりに美しく、そして男性はチビ、出っ歯、眼鏡を決まりに、ほぼ醜く描いていました。

「主旨」は、婦人結束会の設立を宣言し、賛同をお願いするとともに、会への参加を呼びかけて終わります。

…日本の婦女子の結髪を改める運動を起こすために、志を同じくする人を広く集め、みんなで団結して決行したい。この目的に賛同する紳士、ご婦人はぜひ発会員に参加してください。…

婦人束髪会は「主旨」通り、セルフできる洋髪を紹介したパンフレットを作成し講演会活動と連動して広めるとともに、新聞や雑誌を活用して結髪を改める運動を展開していきます。活動期間は 2 年ほどで長くはありませんが、婦人束髪会がその後の日本の婦女子の髪型をはじめ美容業界に残した影響は少なくありません。

資料

『日本結髪全史』（江馬務、創元社）
『近世風俗史』（『守貞謾稿』、喜多川守貞、岩波書店「岩波文庫」）
『嬉遊笑覧』（喜多村筠庭、岩波書店「岩波文庫）
『都風俗化粧伝』（佐山半七丸、平凡社「東洋文庫」）
『江戸結髪史』（金沢康隆、青蛙房）
『江戸ッ子』（『鳶魚江戸文庫』、三田村鳶魚、岩波書店「岩波文庫」）
『江戸の化粧』（渡辺信一郎、平凡社「平凡社新書」）
『装束の日本史』（近藤好和、平凡社「平凡社新書」）
『黒髪の文化史』（大原梨恵子、築地書館）
『遊女の文化史』（佐伯順子、中央公論社「中公新書」）
『いきの構造』（九鬼周造、角川書店「角川ソフィア文庫」）
『江戸東京の明治維新』（横山百合子、岩波書店「岩波新書）
『京都＜千年の都＞の歴史』（高橋昌明、岩波書店「岩波新書）
『武士の町　大阪』（藪田貫、中央公論社「中公新書」）
『今和次郎　考現学入門』（藤森照信編、筑摩書房「ちくま文庫」）

『きよのさんと歩く大江戸道中記』（金森敦子、筑摩書房「ちくま文庫」）
『武家の女性』（山川菊栄、岩波書店「岩波文庫）

『武士の娘』（杉本鉞子、筑摩書房「ちくま文庫」）
『江戸東京実見画録』（長谷川渓石・画、岩波書店「岩波文庫）
『下級武士の食日記』（酒井伴四郎、青木直己、筑摩書房「ちくま文庫」）
『武士の絵日記』（尾崎石城、大岡敏昭、角川書店「角川ソフィア文庫」）

画像・絵画関係

『レンズが撮らえた幕末明治の女たち』（小沢健志、山川出版社）
『幕末　写真の時代』（小沢健志編、筑摩書房「ちくま学芸文庫」）
『江戸名所図屏風』（内藤正人、小学館「アートセレクション」）
『「熙代照覧」の日本橋』（小沢弘、小林忠、小学館「アートセレクション」）
『洛中洛外図＜舟木本＞』（奥平俊六、小学館「アートセレクション」）

外国人関係

『ビゴーが見た日本人』（清水勲、講談社「講談社学術文庫」）
『ワーグマン日本素描集』（清水勲編、岩波書店「岩波文庫」）
『絵で見る幕末日本』（エメェ・アンベール、講談社「講談社学術文庫」）
『一外交官の見た明治維新』（アーネスト・サトウ、岩波書店「岩波文庫」）
『シュリーマン旅行記　清国・日本』（ハインリッヒ・シュリーマン、講談社「講談社学術文庫」）
『日本その日その日』（エドワード・シルヴェスター・モース、講談社「講談社学術文庫」）
『江戸幕末滞在記』（エドゥアルド・スエンソン、講談社「講談社学術文庫」）
『ザビエルの見た日本』（ピーター・ミルワード、講談社「講談社学術文庫」）
『ヨーロッパ文化と日本文化』（ルイス・フロイス、岩波書店「岩波文庫」）
『英国人写真家の見た明治日本』（ハーバート・G・ポンティング、講談社「講談社学術文庫」）
『英国外交官の見た幕末維新』（A・B・ミットフォード、講談社「講談社学術文庫」）
『幕末日本探訪記』（ロバート・フォーチュン、講談社「講談社学術文庫」）
『世界漫遊家が歩いた明治ニッポン』（中野明、筑摩書房「ちくま文庫」）
『日本紀行』（イザベラ・バード、講談社「講談社学術文庫」）
『シドモア日本紀行』（エリザ・R・シドモア、講談社「講談社学術文庫」）
『東京に暮らす』（キャサリン・サンソム、岩波書店「岩波文庫」）
『「ザ・タイムズ」にみる幕末維新』（皆村武一、中央公論社「中公新書」）

データベース関係

国立国会図書館デジタルコレクション　https://dl.ndl.go.jp/
国立国会図書館日本法令索引　https://hourei.ndl.go.jp/#/
国立公文書館デジタルアーカイブス　https://www.digital.archives.go.jp/
東京都公文書館情報検索　https://www.archives.metro.tokyo.lg.jp/
東京大学史料編纂所データベース　https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/

『日本史年表』（増補版、歴史学研究会編、岩波書店）